広　告

企画・制作＝
日本経済新聞社Nブランドスタジオ

株式会社 メディパルホールディングス

あの日の記憶を胸に

この国の安全・安心を支えたい

メディパルホールディングス 代表取締役社長
渡辺 秀一（わたなべ・しゅういち）
兵庫県洲本市出身。法政大学法学部卒業。1979年にクラヤ薬品入社、2000年にクラヤ三星堂（現：メディパルホールディングス）取締役、11年に同社副社長を経て、12年に同社社長に就任する。

女優
大和悠河（やまと・ゆうが）
東京都出身。1995年に宝塚歌劇団に入団。宙組男役トップスターになる。09年、退団。以降は女優として、ブロードウェーミュージカル「CHICAGO」主演をはじめ、幅広い舞台で数々の主演・ヒロインを務める。テレビ・出版メディアでも活躍。

元宝塚歌劇団トップスターの大和悠河さんは卒業試験の当日に阪神・淡路大震災に遭った。現地の惨状は今も目に焼き付いているという。一方、災害対策を強化した物流拠点であるエリア・ロジスティクス・センター（ALC）を全国に配し、2023年９月１日、全国物流構想の最後となる13カ所目の「阪神ALC」を兵庫県西宮市に完成させた医薬品卸売業大手のメディパルホールディングス。同社の渡辺秀一社長と大和さんが災害対策への思いを語った。

過酷な状況での温かさ 社員皆が感じた使命感

大和　あの日は宝塚音楽学校の卒業試験日でした。試験に備え早く起き朝食をとっているときに、大地震が発生。電車は脱線、近所の建物もあちこちで倒壊するなど、一変してしまった街の中を何時間もかけて歩き、やっと動いている電車に乗ることができました。少し走っただけで車窓の風景は日常とあまり変わらず、つい先ほどの惨状との違いに涙があふれました。

２週間ほどたって練習を再開したのですが、「これは続けていいのだろうか」という気持ちがぬぐえません。そんなときに身に染みたのが、近所の皆さんの心遣いです。「シャワー使って」「足りないものはある？」と声をかけていただいて。大震災に遭って初めて、その温かさを知りました。

渡辺　阪神・淡路大震災と東日本大震災。この２つの災害は決して忘れることができない惨禍であると同時に、過酷な状況でも他者を思いやる気持ちを忘れない日本人の姿を見ることができた機会だったと思います。医薬品、日用品などの流通を担う当社グループでは、神戸でも、東北でも、自分たちが被災していても医薬品や日用品を必死で届ける従業員の姿がありました。もちろん会社が指示したわけではなく、命の危機にひんした患者さん、生活者のことを考え、皆、使命感にかられて行動してくれたのです。

国のインフラ支える自負 理念突き詰め社会に貢献

渡辺　当社は様々な災害対策を施したALCを全国13カ所に展開しており、今回最後のALCを建設したのが、震災で大きな被害を受けた西宮市内であり、運命的なものを感じます。様々な災害の経験を生かした対策をこのセンターに凝縮しています。

大和　やはり災害に対しては備えが大事ですね。私も被災以来、常に１泊できるような支度を持ち歩いています。出先ではまずどこに避難できるかをチェックするなど、もしもの事態を常に考えるようになりましたね。

渡辺　有事のときに何をすべきか、私たちは「この国で、薬を届けるという使命。」を常に心に刻んでおり、命を支える薬を届け続ける当社グループの機能は、この国のインフラであると自負しています。

自然災害に限らず、環境の変化や技術の進歩など、これからも社会は様々な変動にさらされるでしょう。でもどんなに社会が変化しても、人類には健康という共通の願いがあります。そして私たちの理念は「流通価値の創造を通じて人々の健康と社会の発展に貢献します。」ということ。「医療と健康、美」の事業フィールドでそれを突き詰め社会への貢献を果たしたいと考えています。

大和　日常の当たり前を支えてくれる存在が身近にあるということはとても心強く感じます。

インタビューの詳細は
日経電子版広告特集でご覧ください
https://ps.nikkei.com/medipal2309/index.html

ALCは防災設備として、建物自体の免震構造、棚の転倒や商品の落下を防ぐ免震装置、非常用自家発電設備、保冷車両の配備、緊急配送用バイク、自家給油施設などを備える。またホストコンピューターや通信ネットワーク、物流機器などの２重化や、データのバックアップを備え、仮に１つの物流センターが供給できない状況となっても、近隣エリアやグループ各社の物流センターと連携し、商品を供給する体制を整える。